

明治草創期の教育者
上浮穴郡の名郡長

ひがき
松垣

しん
伸翁

元松山市素鷲小学校校長
伊予史談会会員

上岡 治郎

一、『愛媛教育』を読んで

昭和三十八年春、附属小学校の『八十年史』を編集していた私は、愛媛大学の図書館で『愛媛教育』という教育会発行の月刊機関誌を見つけた。

そして、そのうす暗い書庫の一隅で『学制頒布当時の追懐』という文章を読んだ時の感激は四十年後の今も忘れることができない。それは、明治草創期の初等教育者の実際を目のあたり

に見る思いであった。

なお、この文章は、学制頒布五十周年に当たると大正十一年、当時の師範学校長山路一遊先生に招かれた松垣伸翁が「伊予の阿房宮」と呼ばれる師範学校本館二階の校長室で話されたもの

のまとめであることを知った。そして私は、明治維新による廃藩置県後の愛媛教育に関心をもち、内藤素行著『鳴雪自叙伝』や、山路一遊先生の遺稿集『天放集』などを読み、新しい明治

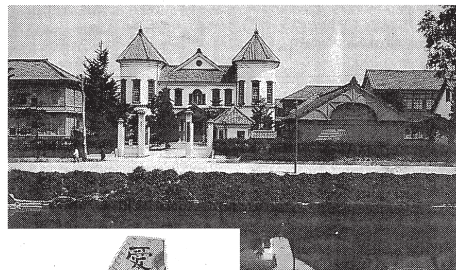


若き日の松垣伸翁

草創期の愛媛教育発展の基礎を作ったのは、内藤鳴雪翁と松垣伸翁であるとの確信を得た。

二、愛媛県師範学校本館

大正十一年に山路・松垣両先生が談話されたという師範学校本館の写真をここに載せる。



▲師範学校本館・全校舎
昭和20.7.26の大空襲で全焼する



◀その記念碑
昭和47.11.30建立

三、創設期の松山の小学校

山路・松垣両先生が対談された翌年の大正12・3山路先生はご退職。松垣先生も、その二年後の大正13・11にご逝去された(享年七十五歳)。

もし松垣伸翁のお話が記録されていなければ、明治初年の松山の教育界の実情を知ることができない。そして、全国的にも珍しく、大切な教育遺産であると言うべきである。次にその一部を載せる。

「明治五年の学制頒布当時、私はまだ二十一、二歳の青年であった。それまで藩校「明教館」の助教として福沢先生の翻訳書などを講じていたが、家事上の関係から青雲の志をすて、一生を初等教育に捧げることを決心教師としての修養に努めた。

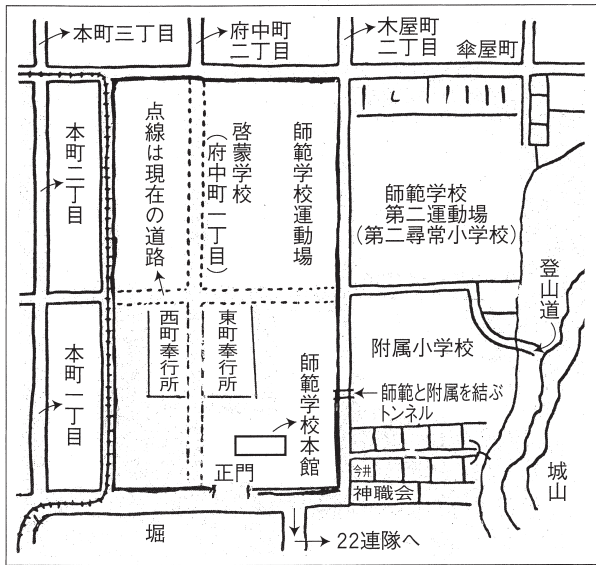
丁度その時、学制が頒布され松山にも小学校が設けられることになり、私は啓蒙学校(府中町一丁目)の主座教員(校長)に任命された。

その時、松山に設立された小学校は、明治五年に勝山・巽・智環・啓蒙・清水の五校と、明治六年に開通の計六校であった。当時の生徒の授業料は一月一錢五厘。教員の俸給は主座教員で四円、一般教員は三円、授業生(代用教員)は一円であった。教授法は寺子屋式のやり方で、屋敷の大広間の正面に端座する教師の前へ生徒が順番に出かけて、教育を受けるのが普通であった。

このように当時の小学校は、形式上きわめて幼稚であったが、新教育に対する上下の熱心さは非常なもので、私の勤める開校当時僅かに二十三人に過ぎなかった生徒数が明治七年には一躍三百五十七人となり、中略

。当時の小学校教員は、旧藩時代の藩学の教師か、または寺子屋の師匠が多く、正式に教員たる課程を修めた者は稀であった。

明治23年に新築移転した師範学校の図面



そこで私は、明治七年に広島師範学校が開校し生徒募集があったので、直ちに応募し学課試験に合格したが、卒業後郷里に帰れないことを聞き、家庭の事情もあり、入学を辞退して、再び啓蒙学校に勤めることになった。

そして、明治七年十二月、養父母の許しを得て、東京師範学校附属小学校参観の途に上ったのである。

さて、いよいよ授業を参観してみると、こはそもいかに、自分等が郷里の学校で一人々々の生徒を相手に、「イト、イヌ、イカリ」と単語篇を繰り返すような遣り方とは全然ちがって、三間に四間の長方形の洋式建築

の教室の中で、整然たる一斉授業が行われ、教室の出入りは、「一、二」の号令に足並みを揃える。「礼」の令で全生徒が恭しく敬礼する。質疑応答に挙手を以てする等、活気旺盛せる新式の教授に、全く魂を奪われたのであった。

見学旬余、つぶさに新教授の形式を了解した私は、甚大の期待を胸に描きつつ、足もそぞろに故郷へと急いだのであった。

新教育への憧憬に他念のない青年教育者たる私は、教育刷新の念頭の下に、日夜有志の間を奔走した結果、当時としては破天荒の寄付二千余円を集め、府中町一丁目(のちの師範学校校地内)に二階建の校舎を新築し、市内各学校に率先して新式教授の実行に着手し、世間を驚かせたのであるが、当時の得意さは五十年後の今日なお忘れられぬ。おそらく私の生涯における最も愉快な思い出の一つであろう。

この松垣伸翁のお話を読み返す時、若き日の翁の教育者としての信念と実行力に敬服する。なお、第二の「坂の上の雲」の物語でもあろう。

四、松垣先生の生い立ち

松垣伸先生に関心を持ちだした私は、先生が私の師範学校時代の恩師藤井周一先生の外祖父に当たられることを知り、早速に藤井周一先生のお宅を訪問した。

そして周一先生からいろいろなお話を聞くのと共に、お写真と、浮穴史談会第二号『松垣伸特輯』をお借りした。

以下、その時調べた伸先生の生い立ちを略記する。

- 嘉永3・9・18 父野田吉右衛門惟徳、母吉の次男として誕生。幼名(友諒)のち(淑人)通称(斧右衛門)のち(伸)と改める。
- 安政6・12・15 10歳で松垣家の養子となる。養父は浅之助実弘、養母はトラ。実父はその年の8月3日病没する。
- 慶応2 17歳で藩学「明教館」に入學。その年12月、槍術中段の免許をとり、槍術修業世話役を命ぜられる。
- 明治2 20歳の時、養父隠居し家督を相続する。その年、明教館助教を命ぜられる。
- 明治4・1 22歳の時、文学修業のため、高知藩留学を命ぜられる。
- 明治5・10 松山の啓蒙学校主座(校長)に任命せられる。
- 明治7 広島師範学校を受験し、合格するも、家庭の事情で中止、啓蒙学校の前職を継続すると共に、12月上京して、東京師範学校付属小学校で、新しい教育を視察する。帰松後、愛媛県で初めての一斉授業を始め、府中町二丁目に洋式

- の校舎を建てる。
- 明治8 学区取締(司学)を命ぜられる。
- 明治9 27歳で師範学校創立事務長、続いて同校監事を命ぜられる。
- 明治11・12・16 下浮穴郡郡長に任命せられる。
- 明治12・5・13 伊予郡郡長兼務を命ぜられる。
- 明治13・2・23 養父実弘死去する。
- 明治14・9・14 上浮穴郡郡長に転任。旧藩時代の天災飢饉に備えて蓄積保管していたものの分散を説得して止めさせる。
- 明治17 四国新道の議あり、以後寢食を忘れて奔走する。(35歳)

ところで、伸先生が年わずか十歳で実父を亡くされるといふ人生の最大悲劇に遭遇しながらも、よくその逆境を克して、郷土の偉人として敬慕される人物に成長したかげには、実兄野田直幹氏のあったことを忘れてはならない。

兄直幹氏は、わずか十五歳で、亡き父に代わって伸先生を松垣家に養子に出すなど、弟妹の世話をしたということである。

そのため伸先生は、真に父に仕えるように兄を敬慕し、兄弟ともに絶対の信頼で結ばれていたということである。

そして直幹氏が七十五歳で亡くなられた時は、涙ながらに兄の体を撫で、「俺も兄さんと同じ七十五歳になったら死んで逝く」と予言し、事実、兄と同じ七十五歳で死去されたのである。

五、郡長となつて

① 下浮穴郡長時代

明治十一年に郡区町村編成法が公布され、愛媛県にもはじめ郡長を置くようになった時、岩村県令（今の県知事）は、師範学校創設事務長及び同校監事としての先生の力量と、高潔な人格を認め、先生を下浮穴郡の郡長に抜てきされた（郡役所は森松）。

そして途中で、伊予郡長を兼務したこともあったが、明治十四年に上浮穴郡の郡長に転任されたのである。

② 上浮穴郡長時代

上浮穴郡での郡長生活は、明治十四年から同二十七年までの十四年間の在職。そして、その間に、植林や、三極（みつぎ）、馬鈴薯、お茶などの生産の奨励、久万山凶荒予備組会を結成、教育の充実に力を入れた。

ところで、ここでは次の二つのことを強調してまとめたいと思う。

●（その一）衛生思想の普及

衛生思想の遅れている上浮穴郡住民の健康を心配していた松垣郡長は、近代医学を身につけた医者を上浮穴郡に迎えたいと願っていた。

そして、明治十七年（一八八四）に東京帝国大学を卒業した松山出身の藤井文郁氏に依頼し、久万町で医院を開業してもらうことが出来たのである。

藤井文郁氏も又、松垣郡長の期待に応え、亡くなるまでの三十七年間に、地域住民の医療活動や、医師会の世話役、そして学校医として、上浮穴郡民のために尽くしたのである。



久万の町にある藤井文郁氏の旧宅



藤井文郁氏



妻イク（仲翁の長女）

●（その二）四国新道建設

えらいものぞな 明神馬子は
三坂夜でて 夜もどるよ
三坂通いすりゃヨ 雪降りか
かるヨ
戻りゃ妻子が 泣きかかるヨ

明治十四年、こんな馬子歌も真に迫る三坂峠を、三十五歳の若さで上浮穴郡の郡長に命ぜられた松垣伸翁は、生まれ故郷松

一ツトセ 人の知りたる伊予土佐の 通路は山また山ばかり ソレ開さくセー
二ツトセ ふだんの運輸も戦時にも 通行便利が第一よ ソレ国のためー
三ツトセ 道は馬車道四間幅 一間三寸勾配に ヨク測量セー
四ツトセ よもやだのみじゃ出来はせぬ 前代未聞大事業 ミナ熱心セー
五ツトセ 岩も掘割れ山もぬけ 往來に不自由のないように ソレ破裂業ー
六ツトセ むつかしうても三年の 月日のうちには仕上げたい コノ開さくをー
七ツトセ 難所の工事は久万三坂 黒岩 黒川 大身楯 ソレ突き通せー
八ツトセ 約束極めし村々の 出し夫は一戸に百人余 ソレ精を出せー
九ツトセ 工事のつもりは三十万 官金ばかりを当にせず ミナ負担せよー
十ツトセ 通りぞめには賑やかに 開通式をばして見たい 土予国境でー

（参考）新道開さくかぞえ歌
松垣郡長作（明治19年）

山から馬の背に乗って赴任してきた。馬と馬のすれ違いもできぬ一メートルに足らぬ山道、一歩誤ればはるか下の谷底へ転落する。

松垣郡長は、松山―三坂・久万―高知を結ぶ道路建設こそ、上浮穴郡の開発発展をにぎっていること確信した。やっと、ほん走のかいあつてこの「四国新道」の建設が始まったのは明治十九年。

その際、翁は、めざした「四国新道」のほか四国横断鉄道建設が日の目を見なかったことを残念がったという。「生ある間に成しとげられなかつたことが成就するのを見たい。それ故、遺骨は久方に埋めてほしい。葬式も戒名もいらぬ。自分の志を表す文句を考えてほしい」遺言どおり、久万町真光寺に埋められ、墓には「埋骨注心血地」

とある。
やがて、翁が心血を注いで完成した「四国新道」は、昭和二十七年、国道三三三号線に昇格、四十二年には全線舗装路となり、Vラインと呼ばれる、四国の交通の大動脈となったのである。



久万の松垣伸翁のお墓におまいりする松垣端氏（伸翁の後継者）



昭和6年3月、省営バス開通決定を記念して三坂峠に建てられた上浮穴郡長・松垣伸翁の頌徳碑

六、久万高原町を訪ねて

◀▼平成13.11.16付愛媛新聞記事



国道33号生みの親

松垣伸の偉業 後世に

久万「顕彰する会」発足

明治時代に国道33号開削に取り組み、大きな功績のあった松垣伸を顕彰する会の結成総会が松垣の命日でもある十五日、上浮穴郡久万町の町民館ホールであ

った。松垣伸は一八五〇年生まれ。八一年から上浮穴郡長を務め、早くから三坂峠を抜く道路の必要性を訴え、四国新道(丸亀・多度津―高知―松山、現在の国道32、33号など)の開削に尽力。自ら先頭に立って実測やダイナマイトを研究、ともに樋(つち)を掘る、国道33号生みの親と言われている。昨年、孫の端さん(ハニ)東京都足立区在住から「郷土に奉仕したい」と寄付金の申し出があり、活用策を検討。「顕彰する会」を発足、事業調査などを行うほか、同町東明神に松垣桜公園の整備を進めることにしていた。

会には約三十人が出席。生い立ちについて説明があった後、経過報告。玉水寿清久万町長を「顕彰する会」の会長に選出するなど九人の役員を選出。本年度の事業計画として、業績紹介や松垣桜公園の事業活動の広報などを決めた。閉会後参加者は国道33号わきで墓参りを行い、先人の偉業にあつためて思いをはせていた。



教育長
西田友三氏

「松垣伸翁を顕彰する会」の結成総会は、平成13年11月15日に開催され、上の新聞記事にもあるように、約30名の会員が集まり、具体的な話し合いを持った。

七、教育長さんのお話

平成十七年二月二十二日、久万高原町の教育委員会をお訪ねし、教育長さんから、いろいろなお話や資料を頂いた。

〈結成総会次第〉

結成総会の印刷物▶

1. 町長あいさつ
2. 松垣伸翁の生い立ち
3. 松垣伸翁を顕彰する会と松垣桜公園
4. 会則決定と役員選出
5. 活動事業計画と予算案承認、その他



着々と準備がすすむ「松垣桜公園」

この工事が完成した時こそ、松垣伸翁が心血を注いだ夢も完成するのである



三坂第1トンネル工事用車両出入口

八、現在着工しているトンネル工事

- 平成8年事業化
- 平成11年度用地買収、工事着工
- 平成19年完成予定

現在着工している事業計画の概要

- ①路線名 一般国道33号 三坂道路
- ②区間 (自)上浮穴郡久万高原町東明神 (至)松山市久谷町大久保
- ③延長 7.6km
- ④計画交通量 12,400台
- ⑤道路規格 第1種第3級
- ⑥設計速度 80km
- ⑦標準幅員 10.5m



三坂第1トンネル工事